

第三章

黙示録の七つの教会 ペルガモ

ペルガモ——「離婚した」、「霊的な姦淫」——第4世紀から中世初期まで



『また、ペルガモにある教会の御使いに書き送れ。『鋭い、両刃の剣を持つ方がこう言われる。

「わたしは、あなたの住んでいる所を知っている。そこにはサタンの王座がある。しかしあなたは、わたしの名を堅く保って、わたしの忠実な証人アンテパスがサタンの住むあなたがたのところで殺されたときでも、わたしに対する信仰を捨てなかった。しかし、あなたには少しばかり非難すべきことがある。あなたのうちに、バラムの教えを奉じている人々がいる。バラムはバラクに教えて、イスラエルの人々の前に、つまずきの石を置き、偶像の神にささげた物を食べさせ、また不品行を行なわせた。それと同じように、あなたのところにもニコライ派の教えを奉じている人々がいる。だから、悔い改めなさい。もしそうしないなら、わたしは、すぐあなたのところに行き、わたしの口の剣をもって彼らと戦おう。耳のある者は御霊が諸教会に言われることを聞きなさい。わたしは勝利を得る者に隠れたマナを与える。また、彼に白い石を与える。その石には、それを受ける者のほかはだれも知らない、新しい名が書かれている。』』（黙示録2章12節-17節）

● ペルガモの都市

今日、『ベルガマ (*Bergma*)』と呼ばれるペルガモは学問の中心地で、20万冊の蔵書（もちろん当時は手書きですが）を誇る図書館を持っていました。『パーチメント（羊皮紙）』という言葉はその都市の名前に由来しています。当時の人口は12万人であったとされ、ロ

ーマ地方総督の駐屯地でした。

ペルガモにはオカルトの中心地が豊富にあり、皇帝やゼウス、アテナ、ディオニュソス、デメートル、ヘラ、蛇に象徴される『救い主』であるアスクレピオスに奉獻された神殿がありました。神がモーセに造るように命じた青銅の蛇と違い、クリスチャンたちはそのアスクレピオスの象徴である蛇をサタンと関連付けていました。

ゼウスへの祭壇は非常に目立つものであり、町の上部約 240 メートルの場所、山腹から突き出た岩の上に約 27 平方メートル、6 メートルの高さで立っていました。その 12 の冠石がベルリンに今日も展示してありますが、その土台跡はベルガマに残っています。またこの都市は最初に皇帝崇拝の座が設けられた都市でもあります——紀元前 29 年にカエサル・アウグストゥス崇拝のための神殿が公認されました。毎日ささげられる数えきれないほどのいけにえから出る煙は、当時の人誰もが目にしたでしょう。それゆえ、クリスチャンたちはささげられた肉を食べること、また性的不品行、バラム（民数記 22 章に登場する予言者）の教え、ニコライ派の行いなどによって偶像礼拝におびき寄せられていました。これらはすべてイエスが悔い改めるべきと言われたことです。

ペルガモはゾロアスター教哲学とペルシャに起源を持つ神智学が西洋の足がかりを持った場所です。町を見下ろす山にゼウスの祭壇と隣接してミトラの神殿がありました。ミトラはエジプトや南方から来た神です。北方と西方からはアテナ崇拝がありました。またその町にはディオニュソスの神殿もありました。ディオニュソスはギリシア神話においてゼウスの中性的な息子で、そのディオニュソス崇拝で人は自制を失った恍惚状態になっていました。音楽により崇拝者たちは感情的に操られ、霊的な狂気に陥った宗教と見なされていました。

今日、トロント・エクスピリアンスやフロリダ・ペンサコーラでの失敗に終わったリバイバル、レイクランドの失態などの欺きの中で見られる現象の大半は、キリストの性質にある礼拝というよりかは、ディオニュソスの性質を持った崇拝です。御霊の実はいつでも『自制 (*egkrateia*)』です。もし誰かが自制できない状態に陥っているなら、神は支配しておられません。（聖書から見て聖霊の賜物が今でも機能するという事実と混同しないほしいのですが）現代の超カリスマ派の狂気沙汰はコリントにて始まりました。しかしペルガモにおいても中心となっていたものでした。

（ローマ人が「ユピテル」と呼んだ）ゼウスがギリシア語のセオスから来たものであったように、ゼウスの息子ディオニュソスはキリストを悪く真似したものでした。それはゼウスを父に持ち、人間の母を持ったヘラクレスが一種の救いを庶民にもたらす超人として

到来したとされるのと同じです。ディオニュソスは別のギリシアの女神の息子だったのでないかとさまざまに議論されています。これを理解すると、コンスタンティヌス帝の後の異教化された教会の始まりに、ディオニュソスのモチーフがなぜ用いられていたかが分かります。

ペルガモでのアテナ崇拝はアテネに次ぐものでした。アテネとペルガモは、カルト的な女神崇拝の中心として、現代で言うフランスのルルドやポルトガルのファティマでした。永遠の処女性とキリストの花嫁としての処女たちの修道院という概念は、東はバビロンから来て、小アジアに到来したセミラミスとタンムズ崇拝に起源を持つペルガモに影響されたものです。一方でこのようなものはペルガモを通して、帝政ローマのパンテオン神殿にポンティフなる皇帝と共に取り入れられました。ローマ神話の『ウェスタの処女 (*Vestal Virgin*)』は女子修道会として知られる女性の修道院生活の先駆けとなりました。

要約すると、ペルガモはアレキサンドリアのように、古代バビロンに由来する神秘宗教がギリシア・ローマ世界に最初に道を見出した玄関口であったということです。この都市は地理的にどの場所よりも、東西南北から異教が集中してくる土地でした。

● 実際にペルガモから出たもの 今日私たちと共にあるもの

その中で特に注目すべきものがアスクレピオス・ソテール——ヘレニズム世界の「救い主であり癒し主」の神殿でした。ゼウスやミトラ、アテナなどの神殿の尾根の下町跡では、神殿の建物と隣接した病院が発掘されています。その場所で最も重要な人物としてはペルガモのガレノス (*Galen of Pergamum*) が挙げられます。アスクレピオス崇拝に基づいた癒しの哲学を広め、人の体質と四種類の体液の関係を調べる臨床的アプローチに至ったのはこのペルガモのガレノスです。現代的な性格分析は何も新しいものではありません。それは異教に起源を持つものが変化したものです。その性格分析は人を楽観、陰鬱、不活発、短気などの気質に分類し、精神的に、心理学的に、また霊的に診断するものでした。この古代の迷信を現代風に改訂したものは、リック・ウォレンとそのパーパス・ドリブンによる弟子訓練の中心となっています。このようなものが新生したクリスチャンの霊的賜物を見分ける方法としていくつかの教会で用いられてしまっています。

聖書的な心理学は、人が三位一体の神の御姿に似せて造られている『イマジオ・デイ (*imago dei*)』というものです。それゆえ私たちは体とたましい（意思）、霊を持っています。それは神として肉体を持たれたイエス、御父の意思、聖霊と関連しています。人の心理構成に関する聖書的な理解は、霊はたましいから区別されうるというものです。一方東洋宗教と世俗の心理学は、人の霊的また形而上的な機能が意思かたましいの機能だと言

います。ヘブル人への手紙4章12節は霊とたましいを区別するように教えていますが、心理学やシャーマニズム、神秘主義イスラム教、仏教、ヒンドゥー教、故ノーマン・ヴィンセント・ピール (*Norman Vincent Peale*) によるポジティブシンキングに基づいた神学 (ロバート・シューラーや、チャー・ヨンギなどによってコピーされたもの) は、霊とたましいを本質的に一つのものとして捉えています。

加えて神がアダムに息を吹きかけられた時、アダムは生きるたましいとなりました。それゆえ人々の心理的、知性的、感情的な面は、霊的な面と生物的な面の結合だということが分かります。言い換えると、精神病は決して意思には由来していないということなのです。変わった振舞いや異常行動は生理的に何かが悪い (たとえば甲状腺ホルモンが過剰な病気や、アレルギー性の幻覚症状、または薬物による反応など)、霊的に何かが悪いかどうかです。またはその二つの要因の混合という場合もあるかもしれません。クルト・コッホ博士 (*Dr. Kurt Koch*) やジェイ・アダムス (*Jay Adams*) のような数少ない聖書的福音派の臨床医たちはこのことを聖書的に理解していたようです。しかしながら、現代キリスト教心理学の支持者の大半はそうではありません。

聖書的な心理学は人の三つの側面を認識し、人の行動を箴言に基づいて評価します。キリスト教心理学と呼ばれるものの大半はキリスト教ではなく、ただキリスト教の専門用語を用いた心理学にすぎません。また心理学自体が (代謝と行動の関係を扱う精神医学の薬品、生態心理学、神経心理学を除いて) 偽りの科学です。心理学はまた事実上ヒューマンイズムの宗教として現れている偽りの神学です。また生物学で測定できるものではありません。それゆえ心理学は (人の頭の中で人間が神格化されない限り) 実際の神学ではないのと同じように、科学でもないのです。

私たちが『心理学』と呼ぶ詐欺師の仕事はその大部分をペルガモに負っています。現代の教会の多くがキリスト教的であると偽ってしまっている霊性と行動主義の偽りもまた、ペルガモに起源を持っているのです。

● 未来の歴史的・預言的な対型

第一世紀終盤のペルガモの教会はニケア公会議の時代から暗黒時代を予兆する型となっています。歴史的にこの時代は合理的な形で使徒の教えが残っていた最後の時代でもあります。この時代の初期にイベリアでキリスト教の牧師をしていたプリスキリアヌス (*Priscillian*) という人が殉教しました。この殉教は異教世界によるものではなく、(その時代に勢いを増していた) 異教と背教に対して聖書の正当性を保っていたがために教会により初めて殺害されたのです。この時代はまたヨーロッパがバイキングの侵略により制圧

された時代でした。

修道院主義の初期の形が荒野の教父たちによって始められました。彼らは中東の荒野で世捨て人的な生活を送ることにより、ニケア公会議後に拡大したこの世的な風潮を逃れようとした神秘主義者のような人たちでした。またこの時代に東洋が西洋と顔を合わせ、仏教徒たちが遠くアレキサンドリアまで到来し、キリスト教修道院主義に東洋宗教の影響をもたらし始めました。半島や島々が多くあるアイルランドやスコットランド、イングランド、ウェールズのケルト人たちの間では、中東の荒野で修道士たちが得ていた安らぎを得ようと、修道院主義が出現しました。

ビザンチン時代の伝統は、ロシアから大西洋までを侵略したバイキングの副産物としてイギリス諸島に浸透していきました。この状況を受けて、コロムキル (*Columbkille*) や聖アイブス (*St. Ives*)、聖ボニファティウス (*St. Boniface*) などの人物に率いられたケルト人教会のアイルランド系修道士たちは聖書の写本を写字室や図書館、修道院共同体の中に保存しようと試みました。それはバイキングが印刷物すべてを焼いてしまおうとしたからです。バイキングの時代にキリスト教文化を保存するという点においてケルト人教会が大事な役割を負ったことに疑いはありません。同時に、ヨーロッパで西洋キリスト教文化は滅び、後に酷い抑圧を行う暗黒時代になりました。東の世捨て人的な修道士たちや、ベネディクトやトラピストの修道院の者たちと違い、ケルト人修道士たちは積極的な語り手であり、勤勉な学者でした。彼らは古代ヘブル人に匹敵するような正確さをもって聖書のコーデックスや写本を書き写す能力を持っていました。

この時代にコンスタンティヌス帝の統治にともなって、かつての迫害者であったギリシア・ローマ世界から迷信や偶像礼拝的な影響が教会に侵入し始めました。コンスタンティヌス帝の改宗は数世紀にわたり論争的になっていました。彼はミルウィウス橋において空に十字架を見たという話とは別に他の幻も記しており、生涯の終りになるまで洗礼を受けていませんでした。要するにコンスタンティヌスはキリスト教に改宗したが、異教の肖像が刻まれたコインや習慣をどちらも残し、それをキリスト教界に組み込んだのです。ローマ帝国のさらなる大敗を防ぐためコンスタンティヌスは首都をイスタンブールに移し、キリスト教をラテン系の西と自分の領土であるギリシア系の東をつなげる社会的な道具としました。アウグスティヌスが教会を哲学的にプラトン主義に変えている間、コンスタンティヌスは皇帝の称号と財産をローマ司教に残し、キリスト教をキリスト教界に変貌させ、後にローマ・カトリック、また東方正教会となるものの種をまいたのです。教会内での混ざり合った異教化がここで始まりました。

● 初期のカリスマ主義者たち

テルトゥリアヌスはローマ政府に対しキリスト教を擁護するために法的な形式で文書を記しました。テルトゥリアヌスが法律家であったのではないかと考える人もいます。テルトゥリアヌスは教会を擁護するに当たり、教理のアプローチにおいて整然としており、よく考え抜かれ、聖書的で、キリスト教の信仰をうまく組織化された形で説明しています。しかし後の時代になるとテルトゥリアヌスは道を外れてしまいました。彼のような手腕を持った人がどのようにして大幅に道を逸れてしまうのでしょうか。この質問は、昔は聖書的で、完全に神学的に系統立っていたクリスチャンたちが同じ方向に逸れていくのを見るまで、現代の信者たちを悩ませる問題です。

聖書的神学と異教の哲学に何の整合性も無いと語ったのは他にもないテルトゥリアヌスでしたが、彼は後にモンタヌス主義 (*Montanism*) と呼ばれる初期のカリスマ主義を取り入れました。モンタヌス主義の経験主義的な教理は聖書からというより、東洋的なグノーシス主義に基づいていました。

モンタヌス主義は、預言者と自称する者たちを支持する一団から始まりました。彼らの本拠地はフリギアの田舎にあるペプザ (*Pepuza*) という町でした。人々はキリスト教世界からペプザへ巡礼におもむき、恍惚状態が証拠とされていた霊の分け前を受けようとしてきました。それは17世紀後にトロントやペンサコーラに人々がおもむいているのと同じことです。彼らの名称はモンタヌス (*Montanus* 2世紀) という名から来ましたが、彼らの指導者の幾人かは女性で、いわゆる女預言者たちが主の御名で大それた予言をし、たいていの場合実現しませんでした。彼らが『キリスト教の霊性』と信じていたことは、実際偽キリスト教神秘主義であり、『預言』とみなされていたことはまじないやシャーマニズムに近いものでした。

これらの女性がどのように活動していたかを知ることは、後の時代の同じような人物を観察する上で有益です。同じような女性は1990年代にジンバブエが繁栄を迎えると間違っ
て預言し、1990年代の直前に正反対のことが起こったシンディー・ジェイコブス (*Cindy Jacobs*)、またステイシー・キャンベル (*Stacey Campbell*)、スザンナ・ヒン (*Suzanne Hinn*)、パトリア・キング (*Patricia King*) などです。とりわけ識別力の無いクリスチャンたちを迷わせている現代のシンディー・ジェイコブスや他の自称女預言者たちは、その原型をモンタヌス主義の偽女預言者たちの中に持っています。

女性が教会を迷わせることを許すという問題はいつでも、クリスチャンの男性が責任を持っていない、または神によって定められた頭としての役割を間違っ
た女性に渡してしまっているという証拠です。またそれは今日、真実と共に深刻な誤りを教える繁栄の説教者

ジョイス・マイヤー (*Joyce Meyer*) の中にも見られることです。しかしこのような問題は今日に始まったことではありません。エイミー・センプル・マクファーソン (*Aimee Semple McPherson* 国際フォースクエア教団創始者) のスキャンダルであれ、他人の夫を奪い、名ばかりの悔い改めの後も奉仕に留まっているキャサリン・クールマン (*Kathryn Kuhlman*)、また離婚と再婚を繰り返すポーラ・ホワイト (*Paula White*)、クリスチャン向けの結婚セミナーを行った後に駐車場で夫と喧嘩をするジュアニタ・バイナム (*Juanita Bynum*)、またジェッサ・ハスブルック (*Jessa Hasbrook* トッド・ベントリーを寝取り妻子を捨てさせた女性) の『踊るゾウ』の夢などは、フリギアのモンタヌス主義の中の女預言者たちの狂気と同じであり、その現代版です。このようなものは新しい廃退のスタイルではなく、故タミー・フェイ・バック (*Tammy Faye Bakker*) とジャン・クラウチ (*Jan Crouch*) はアハブとイゼベル女王の物語を大衆の面前で再現していました。それはポーラ・ホワイト、ボビー・ヒューストン (*Bobbie Houston*)、ジョイス・マイヤー、ジュアニタ・バイナム、シンディー・ジェイコブスとも同じです。

モンタヌス主義者たちは立派な動機から始まり、大半の信者が気に掛けていること、御霊の賜物、力、また奉仕における力を強調していました。テルトゥリアヌスはそのような動機に対し同情的でしたが、彼自身その墮落した激しい興奮状態の虜となってしまいました。後にエレナイオスはモンタヌス主義の信条とカリスマ的賜物を用いることを擁護しましたが、テルトゥリアヌスが陥ったモンタヌス主義の間違いを非難しました。信仰の勝者がこの種の霊的欺きにもろくも崩れ去ったという事実は、後の世代への警告として捉えられるべきです。しかし非常に多くの場合、これは警告とはならず、よりよく知っているべきであるキリスト教の指導者たちの多くは経験主義のカリスマニアと聖書的なカリスマを混同してしまっています。

御霊の賜物と超自然的な事象は使徒たちの教会に存在していました。とすると現代にそれはどこに行ってしまったのでしょうか？ モンタヌス主義者と偽預言者のために、御霊の賜物の評判は落ち、多くのクリスチャンが目にしないうものとなっています。

今日、これが多くの場合真実となっています。非常に多くのハイパー・カリスマの人たち (『カリスマ派』とは『カリスマニア』と対峙する言葉です)、また非聖書的で極端な考えに基づき、極端な教えを支持する人たちがいなければ、現代のバプテスト派やブレザレン系の人々は御霊の賜物に対して心が開かれていたことでしょう。彼らの過ちはさらに『神の国は今 (*Kingdom Now*)』という教えを取り入れることによって悪化しています。それは自分たちの権威と指導力の下、イエスさまが戻って来る前に、今御国が到来していると信じるものです。この教えは歴史の多くの時代で、また多くの違った旗印のもとで現れましたが、それらはすべて同じ根本的な考えを持っています。サルデスの教会を学ぶ時に

見ていきますが、16世紀のアナバプテストたちはミュンスターでズウィカウ（Zwickau）の預言者たちに従うことによって欺きに陥りました。近代に起こりもしない予言を告げまわったカンザスシティー・ヴィンヤードの預言者たちと彼らは非常に似通っています。これはテルトゥリアヌスに起こったことと全く同じです。神の国は今という神学、またハイパー・カリスマの過激主義に彼は陥ってしまいました。

誰も初めは自分たちの世代の良い教師たちがこの勝利主義（*Triumphalism*）によって騙され、自分たちを偽預言者や偽教師たちと同列に置くとは考えもしません。しかしこれが初代教会で起こったことであり、今日も現実に行っていることなのです。『日の下には新しいものは一つもない』

● グノーシス主義

ペルガモ教会の時代にはこのようなことが背景にありました。バビロン世界を起源とするものがギリシア世界から教会へと忍び込んできました。それはグノーシス主義です。グノーシス主義にも多くの系統があります。フィロン（*Philo*）は非正統的なユダヤ教を信じていた者で、使徒たちとほぼ同時代の人物でした。彼はエジプトのアレキサンドリアを拠点としていました。その当時アレキサンドリアはアフリカやアラブというより、ギリシア世界に属していました。その時代に教会に多くの思想が入り込んできました。聖書解釈には『演繹的（前提から結論を導く）』手法すなわち教理と、『帰納的（個々の事例から原則を見い出す）』手法すなわち例えで示す方法とがあります。象徴を用いることはそれ自体正しく、聖書的なことです。たとえばイサクやヨセフ、モーセがイエスの象徴だといえます。しかしそのような象徴を元に教理を作るものではありません。ですが、そのような型や象徴に対して何か神秘的な洞察力を持っていると主張するような人は『グノーシス主義』に陥っています。ギリシア語での『グノーシス（*gnosis*）』とは基本的に『神秘的知識』を意味します。

グノーシス主義は『帰納的』でもなければ『演繹的』でもありません。グノーシス主義者は聖書が語っていること以上の知識を持っていると主張します。それはとても陥りやすい罠であり、そのために多くの人々がはまり込んでしまいました。基本的に高慢が人をグノーシス主義に導きます。『心の高慢は倒れに先立』ちます（箴言 16章 18節）。例えをもって教理を説明するための帰納法は受け入れられるものです。しかしそれが決して教理の基礎となってははいけません。

アレキサンドリアで編集された七十人訳がヘブライ語聖書をギリシア語に訳し、（新約聖書の大半がギリシア語で書かれているように）旧約新約間の外典がギリシア語で書かれ

たため、フィロンは純粋なユダヤ的手法とグノーシス主義的またギリシア的な解釈法を混ぜ合わせてしまいました。初代信者たちの解釈法の分裂が起きたのもアレキサンドリアでした。アレキサンドリア学派にはずっとフィロンの影響があり、後にアレキサンドリアのクレメンス (*Clement of Alexandria*) とオリゲネス (*Origen*) に影響を及ぼしました。それに対しアンテオケ学派は、新約聖書と死海文書に顕著にみられるミドラッシュ的解釈法に近い立場を取っていました。

とはいえ、教会はユダヤ人的なものから異邦人的なものに変わっていきました。例を挙げると霊は『善』で、肉体は『悪』だとするギリシア的思考が受け入れられていきました。肉体が元から墮落していることは確かですが、神が創造されたゆえに『悪』ではありません。神はすべて造られたものを見てとても良かったと言われました (創世記 1 章 31 節)。

このギリシア的思考を広めた主な人物はマニ (*Manichean*) です。またローマの執筆家キケロ (*Cicero*) の採った考えでもあります。彼らはまた宇宙論とゾロアスター教について独自の考えを持っていました。それらはどちらも東から、バビロンから来たものです。グノーシス主義は多くの形態を持っていますが、すべてが東から来ました。ヒンドゥー教ではグノーシスを持つ者は教祖またはブラフマン祭司であり、カースト社会の最上位です。その人物がクリシュナまたヴィシュヌのもとに行きます。会衆はその人を通してのみ、自分たちの神のもとへ行きます。ペルシャの古代宗教であるゾロアスター教では、会衆はゾロアスター教の祭司を通して自分たちの神のもとに至ります。

このような考え方はキリスト教だけでなくユダヤ教にも入り込みました。フィロンの影響によりグノーシス主義の兆しは教会に至る以前、ユダヤ教の中に入っていました。ハシド派ユダヤ教はグノーシス主義に基づいています。ハシド派ユダヤ教徒たちは、神が実体を持たず (エイン・ソフ)、性質しか持っていないと考えます。これが中世期にカバラ (*Caballa* 『ゾハール』を教典とするユダヤ教神秘主義) を通して侵入したグノーシス主義の概念です。(彼らにとってのラビである) レッベはグノーシス、つまり神秘的な知識を持つ者とされます。またレッベは数世紀前のヨーロッパでのハシド派運動の創設者バアル・シェム・トブ (*Baal Shem Tov*) という者の子孫たちです。そしてヒンドゥー教のように男の子孫を通してその人物の霊がレッベの中に輪廻転生すると信じられています。

したがって彼らにとって神に至るにはふたつの道があります。トーラーを通して、またツァディクと呼ばれるレッベを通してです。ツァディクとは『義なる者』という意味で、ステパノがイエスに対して用いたのと同じ言葉です。しかしハシド派ユダヤ教徒たちはそれをレッベに対して用いてしまっています！レッベの言葉が神の言葉となり、結婚をまとめたり、信者たちがどこに住み、どこに行くべきか、また仕事や勉強の面までもレッベが

裁定します。レッベが何かを発言すればそれが神の言葉なのです。彼が言うには自分だけがトーラーを通して神のもとに至り、信者たちは自分を通してだけ神のもとに行けるといいます。このような関係は非常に支配的であり、レッベとの関係が御父である神、イエス、聖霊との関係に置きかえられています。レッベが助け主となってしまっているのです。

ローマ・カトリックもこのグノーシスの考えを取り入れました。教皇は自らをペテロの後継者だと偽って主張し、そうすることによって教皇のみが聖書を正しく解釈できる特別な神秘的知識を受け継いでいると考えています。そのため聖書が実際に何を語っているかを読み取らず、教皇独自の解釈を採用しました。それは教皇だけがグノーシスを持ち、彼だけしか聖書を解釈できないというからです。教育を受け、年を取った専門家の『司祭』が誰よりもよく聖書を知っていると考えるのは容易いことですが、このような主張をそのまま鵜呑みにせず、各人が神に信頼し、すべての人を試すことが必要です。

教皇は教皇座 (*Ex Cathedra* ローマのサン・ピエトロ大聖堂にある司教座) より語るとき、信仰と道徳において不謬性 (誤る可能性が無いこと) 持っていると考えられています。それは教皇がペテロの後継者であり、神秘的知識、グノーシスを持っていると考えられているからです。このことがローマ・カトリックの公式教理となったのは 1870 年です。

このために彼らはマリアによって語られた明らかな言葉『わがたましいは主をあがめ、わが霊は、わが救い主なる神を喜びたたえます』(ルカ 1 章 46 節-47 節) を全く違うように解釈してしまいます。分かりやすい言葉でマリアは自分自身が救われる必要があることを語っていますが、カトリック教徒たちは言います。「いや、あなたたちは分かっている。教皇だけがグノーシスを持っているため理解できるのだ。マリアは罪など持っていなかった。彼女は救われる必要が無かったのだ」

このような主張は聖書が率直に語っていることと完全に反対です。

スーフィ・イスラムはイスラムのカリスマ主義的な形態であり、『シャーリア (イスラム律法主義)』と『ディン (イスラム原理主義)』の持つストア主義への反動として出てきたものです。シーア派教徒たちはイランのホメイニのようなイマームを通して自分たちの神アッラーのもとに行こうとします。スーフィ派教徒たちはコーランにより神のもとに至る指導者を介します。彼らはその人物を通してのみ神のもとに行こうとします。このようなグノーシス主義はすべての偽りの宗教の中に見受けられるものです。

アレキサンドリアは東洋と西洋が混じり合うほぼ接点となっていました。仏教の僧侶がインドからアレキサンドリアにたどり着き、そこでユダヤ教徒やキリスト教徒らに会いま

した。マルコ・ポーロが東に向かうはるか以前から、東は西に接触していたのです。

後代になって 19 世紀から 20 世紀のリベラル神学者たちはドイツの合理主義によって影響を受けました。その中で主要な人物がルドルフ・ブルトマン (*Rudolf Bultmann*) です。彼は救いが知識と等しいと語りました。ブルトマンは神秘的知識であるグノーシスを持っていると主張し、そのために聖書を批判的に解釈し、すべての人が見逃してきたイエスの言葉の意味を見出すことができると語っていました。イエスが救いについて語る時、ブルトマンにとっての『救い』とは高い理解と知恵のレベルに到達するというだけでした。教会はブルトマンの持っているグノーシスを持っていないがために間違ってきたというのです。この種の『高等批評』は本質的にグノーシス主義です。

教会内にグノーシス主義が侵入するとき、人々はたいてい使徒の時代から失われていた事柄をようやく理解するようになったと主張します。今日、『再建主義 (*Restorationism*)』の支持者や、いくつかの『ハウス・チャーチ』を見ていると恐ろしくなってきます。同じ精神を持っているからです。彼らは「あなたの聴罪司祭は誰か。あなたの教皇は、レッベ、ブラフマン、教祖様は誰か」と尋ねる代わりに「あなたの使徒は誰ですか」と尋ねます。再建主義の指導者たちは同じように聖書と正反対の事柄を教えます。

ケビン・コナーというオーストリアの自称神学者で再建主義者の書いた本は、聖書の文脈を全く無視して語っています。(これはその人が救われていないと言っているのではありません。信仰を持っている可能性もあるでしょう。むしろその出版物を識別、また聖書から吟味した結果についてですが) その人は黙示録が終わりの日についてのものではないと語りました。『終わりの日』というフレーズはただ紀元 70 年周辺の時代を指すのであって、未来に関する意味は無く、より深い意味も無いと結論付けました。これは明白な文脈を完全に曲解しています。このような考えはグノーシス主義がその源泉です。彼らは自分こそが一番知識があると思込んでしまっています。

この典型的な例は『神の子たちの現れ (*Manifest Sons*)』と『ヨエルの軍隊 (*Joel's Army*)』の教えです。ヨエル 2 章が語るいなごの軍隊は、イスラエルを裁くために神が用いられる邪悪な軍隊で、後に滅ぼされる運命にあると記されてあります。再建主義はそれが神の子たちの現れであり、勝ち誇る教会だと主張します。神が滅ぼされる軍隊の一部に誰が入りたいでしょうか？ 彼らはこの考えをどこから得たのでしょうか？ グノーシスです。誰かが神秘的な知識を持っていると語ったのでしょうか。彼らもまた自分たちが一番知識があると思込んでいました。

このような教えに至るには別の道があります。それは過去主義や歴史主義を信じる人た

ちです。彼らは聖書の預言が初代教会で完全に成就し、未来の意味は無いとします。もうひとつの例は置換神学です。それは神がイスラエルとユダヤ人に対してもう計画を持っていないとするもので、もちろんこの教えは人を反ユダヤ主義に至らせます。

最近の例でいうとアメリカで出されたリック・ゴドウィン (*Rick Godwin*) のテープがあります。(またこの人が救われていないと言いたいのではなく、その教えを吟味しているのですが) リック・ゴドウィンは、神また神の計画とイスラエルが何の関係も無いと語りました。彼は教会こそがイスラエルであり、もしクリスチャンがイスラエルとユダヤ人に対する神の計画があると広めるなら、アラブ系イスラム教徒たちを教会から離れさせることになるとそのテープで語っていました。そしてゴドウィンは自分の教師のひとりであるデイビッド・チルトン (*David Chilton*) を推薦していました。デイビッド・チルトンはイスラム教徒によってイスラエルが海に追いやられるということを教え、その出来事が実現するときに出版する本を書いたと誇っている人物です。これは初代教会でグノーシス主義者たちが陥った結論と同種のもので、イスラエルは『教会』という意味を持っているとして霊的に解釈されました。この人たちも同じ間違った聖書解釈を用いています。

初代教会の時代に現れたもうひとつの考えは、地獄での永遠の責めが存在しないという教えです。アレキサンドリアで初代教会の時代にグノーシス主義的考えを持った主要人物はオリゲネス (185-253) でした。オリゲネスはサタンも救われることが出来たと説き、永遠の地獄が存在せず、永遠の責めも無いと語りました。しかし黙示録 20 章 10 節は断定的に書き記しています。

『そして、彼らを惑わした悪魔は火と硫黄との池に投げ込まれた。そこは獣も、にせ預言者もいる所で、彼らは**永遠**に昼も夜も苦しみを受ける。』(黙示録 20 章 10 節)

今日、永遠の地獄が無く、永遠の責めも無いと教える人たちは、同じ方法でその結論に至ります。この教えを支持する幾人かの顔ぶれは衝撃的なものです。神は預言者たちを次々と遣わしましたが、そのほとんどが殺されたので私たちの代わりにひとり子を遣わされました。私たちがその死に値する者であったのにです。それほど神は私たちにしてくださいました。ですが愛の神は人を地獄へ送ることはできないとある人たちは言います。神は怒るのに遅い方です。といってもそれは神が怒らないということではなく、長い間怒らずに忍耐されるということです。イエスは『たましいもからだも、ともにゲヘナで滅ぼすことのできる方を恐れなさい』(マタイ 10 章 28 節) と言われました。しかしこのような偽りの教師たちが広めている教えはどのようなものなのでしょう。『日の下には新しいものは一つもない』のです。

ギリシア語の『アニオン・トゥー・アニオネス（とこしえからとこしえまで、文字通りには時代から時代へ）』はヘブライ語イディオム『オラマー・オラミーム（世から世へ、時代から時代へ）』の翻訳です。この言葉は神の永遠の栄光、またイエスの永遠に続く大祭司職、私たちの終わりなき救いを表現するために用いられています。またこれは『彼らの苦しみの煙は、永遠にまでも立ち上る』（黙示録 14 章 11 節）という箇所でも使われています。もし地獄が永遠でなく、意識的に感じられるものでなく、ただ霊魂が消滅する場所であるならば、天が永遠であり、意識的に感じられるものであると聖書解釈的に結論付けることはできません。このような聖書解釈的な事実があるにもかかわらず、イギリスのジョン・ストット (*John Stott*) やロジャー・フォスター (*Roger Forster*)、またイマージェント・チャーチの大半の指導者らは、聖書にはっきりと書かれている永遠の地獄を否定しています。地獄が永遠でなく、意識的に感じられるものでなければ、天国についても聖書から証明することはできません。聖書は彼らの主張と全く正反対です。

そのような考えは何も新しいものではなく、ニケア公会議後の教父時代のオリゲネスに遡るものです。ですが現代ではオリゲネスと同じように永遠の地獄を否定する者たちは、さらにサタンの救いという最終的な赦しを信じるようになっていきます。しかし使徒たちが亡くなってから、その時期に複数の欺く者たちが登場しました。真実の使徒的権威の影で隠れていた欺きが根付き始めたのです。やがて事態はさらに複雑化し、聖書的な正統性がただ単なるキリスト教の一派となってしまいました。また根本的に逸脱した教理をもった複数の分派が増大し、偽教師や偽預言者、偽使徒たちにより広められていました。特にさまざまな形態のグノーシス主義がキリストの体に荒廃をもたらしていました。

第二世紀にはエイレナイオスという人が登場しますが、彼は小アジア出身で、ヨハネの弟子であったポリュカルポスの弟子でした。エイレナイオスはグノーシス主義や他の異端に対して聖書的正統性を熱心に擁護し、将来の世代が同じような欺きを見破ることができるように論文を書き残しました。ある意味においてエイレナイオスが最初のウォルター・マーティン博士 (*Dr. Walter Marti* 20 世紀に偽キリスト教への伝道と、逸脱した教理の論駁法を教会に教えた擁護論者) だといえます。

アリウス (*Arius* 250–336) はイエスが御父と同質の存在ではなく、被造物であると教えしました。これはアリウス主義の異端として知られています。今日、それはエホバの証人と呼ばれていますが、同じキリスト論を持っています。

そのアリウス主義者たちの主な反対者はアタナシウス (*Athanasius*) です。アタナシウス派の信条はイエスが「御父とひとつの性質（ラテン語では *consubstantialis*) である」

とします。アタナシウスはひとりの神に、三つの神格があるとの信条により迫害されました。また彼の行ったことは教会に修道院主義を持ち込んだことです。

修道院主義は悪いものとして始まりはしませんでした。教会は世俗的になり、この世と世の汚れに染まるようになりました。そのような中でこの世から離れた共同体で暮らしたいというクリスチャンたちが現れました。それが始まりであり、彼らはただ黙想しながら神を求めたいと思う人たちでした。長い年月をかけ、現代の乞食をするタイの仏教のようなものがキリスト教界に入ってきましたが、始まりはそうではありませんでした。イギリス諸島に到来した修道院主義は特にアイルランドでは非常に肯定的なもので、バイキングの侵略の後にヨーロッパにおいて非常に伝道的な役割を果たしました。彼らはケルト人です。またこの話には戻ってくることにします。

初代教会におけるユダヤ教推進者たちは福音に戒律を付け加える者たちでした。またガラテヤ人への手紙に登場するような安息日遵守者や、食物規定を絶対とする者たちがいました。今日にはセブンスデイ・アドベンチストが同じ教理を持っています。

第二世紀のグノーシス主義者であるマルキオンは創造主なる神は存在しないと教えました。これは進化論を前兆するものとなりました。グノーシス主義の影響の下、マルキオンは旧約と新約の神に極端な区別を設けました。ですが申命記には 9 回「主を愛せ」と書かれており、黙示録は小羊の怒りでいっぱいです。イエスと御父は確実に『ひとつ』なのです（ヨハネ 10 章 30 節）。

ヒエロニムス (*Jerome* 342–420) は聖書をラテン語に翻訳し、ウルガタ訳を生み出しました。ラテン語が当時の公用語であり、一般的な言葉であったからです。彼の注目すべきことはただ旧約新約を翻訳しただけではなく、旧約聖書を七十人訳（紀元前 270 年に訳されたギリシア語版聖書）からではなくヘブライ語から訳したことです。ヒエロニムスはローマ人への手紙から、旧約聖書正典がユダヤ人に与えられたものだと言及しました。これが彼の称賛に値する点です。

ヨハネ・クリソストム (*John Chrysostom* 345–407) は有能な神学者というよりも、雄弁な説教者でした。彼は金の口を持つ男として知られるようになりました。クリソストムは教会に激しい反ユダヤ主義を持ち込んだ責任がある者のひとりです。彼は教会のユダヤ教化に反対していましたが、もう何度も証明されてきているように反ユダヤ主義への道を備えてしまいました。

それよりいくらか時代は下ると、トマス・アキナス (*Thomas Aquinas* 1225–1274)

は聖書を全て比喩的なものであるとし、ユダヤ人に対しては文脈が示唆していない限り、すべてが文字通りの意味だと主張しました。そのようにギリシア的思考が徐々にユダヤ的思考に取って代わりました。これらのことはすべて『スコラ学』の名の下で行われましたが、その『スコラー（教授）たち』はおかしな考えを抱いていました。例を挙げると、教皇は自身が70年間、軍事的脅威の下、アヴィニョンで暮らすことを余儀なくされたことをバビロン捕囚と呼んでいました。（アキナスについては、テアテラの教会の章で詳細に触れたいと思います）

人がイエスの母マリアを『共同贖罪者』とすると、罪の代価として払われた（イエスひとりの）十字架のいけにえというイエスの役割が破棄されてしまいます。また人が煉獄という教理を付け加えるならば、それは第一ヨハネ1章7節の『御子イエスの血はすべての罪から私たちをきよめます』という箇所を無効にしてしまいます。この箇所には**すべての罪**と書かれてあります。この箇所が真実ならば誰かが煉獄に一秒でも行く必要があるのでしょうか。誰かが（罪のために）『贖宥状（しゅくゆうじょう）』を買ったり、ゆるしの秘跡を行う必要があるとしたなら、イエスの血は彼らの罪を覆ってはいないこととなります。もし救いを得るために『ミサ』や集会に出続ける必要があるなら、イエスの血を信じる信仰はそれ自体で十分ではなくなります。マリアの顕現に聞き従わないといけなとする教えは、最後に記録されたマリアの言葉と矛盾します。『あの方が言われることを、何でもしてあげてください』（ヨハネ2章5節）。また御父でさえも『彼（イエス）の言うことを聞きなさい』（マタイ17章5節）と言っておられます。キリスト教は『信仰に始まり信仰に』進むものです（ローマ1章17節）。何も付け加えたり、取り除いたりしてはなりません。

ローマ教皇庁が『ポンティフィカス・マキシマス（*Pontifex Maximus*）』という称号を採用し、その称号がローマ皇帝たちに用いられていたものであり、その以前には神秘宗教を信じるバビロンの皇帝たちに使用されてきたと知ったとき、私は驚きと共に怖いものを感じました。

スイスにて教皇ヨハネ・パウロ二世は、（永世中立国である）スイスはもはや陸の孤島では存在し得ないと語りました。何らかの形でローマ、またはローマ的な政治制度が世を再び支配します。ダニエルは世の終わりまで続く四つの幻を見ました。第四の鉄の帝国であるローマは決して死に絶えません。それは終わりまで形を変え続けています。ダニエル7章23節で『第四の国』は『全土を食い尽くし、これを踏みつけ、かみ砕く』とあります。黙示録17章9節は七つの丘の上にいる女に関して語っており、七つの丘は単にローマを表しています。EUはローマ条約により創設されました。そしてローマは七つの丘から成っています。

神はユダヤ人に申命記 7 章 2 節で『何の契約も結んではならない』と言われました。転々と言う事を変える人たちと契約を結んで何か良いことがあるでしょうか。ベルサイユ条約で第二次世界大戦が防げたでしょうか。神は何が最善かを知っておられます。

ローマは初代教会の時代に世界の偽りの宗教の首都でした。ローマのパンテオン神殿にはローマ帝国中のすべての国の偶像があり、中心に太陽と太陽神アポロを象徴する永遠の火を囲んで一同に崇拜されていました。コンスタンティヌス帝が 321 年にいわゆる『キリスト教徒』となった時、パンテオン神殿に十字架が運び込まれました。コンスタンティヌス帝は偶像を取り去らず、ただそのコレクションに十字架を付け加えたのです。こう説明するとローマ・カトリックのさまざまな象徴がどこから来たかはもう明らかでしょう。新約聖書に起源を持つものでなければ、偽りの宗教から来ているのです。

● イエスの神性

現代のすべての信者は、325 年のニケア公会議と 451 年のカルケドン公会議の犠牲者たちです。歴史を学ぶこと目的は、歴史がどうであったかということに関してではなく、過去の出来事が現代にどう影響を及ぼしたかを知ることです。

カルケドン公会議にて代表の司教たちは、キリストの神性を貶める低いキリスト論を提唱する異端に対して闘っていました。司教たちはイエスが聖霊に満たされた人であったために水の上を歩いたのではなく、神であったから歩いたのだと語りました。そして 5 千人を養ったのも御霊に満たされた人であったからではなく、神だからそうできたとなりました。言い換えると、異端に対してイエスの神性を擁護するため、彼らはイエスの人間性を軽視し、強いていうならイエスの神性を過大視してしまったのです。

聖書は『神性放棄 (*kenosis*)』というものを教えています。

『それはキリスト・イエスのうちにも見られるものです。キリストは神の御姿である方なのに、神のあり方を捨てられないとは考えず、ご自分を無にして、仕える者の姿をとり、人間と同じようになられました。人としての性質をもって現われ、自分を卑しくし、死にまで従い、実に十字架の死にまでも従われました』(ピリピ 2 章 5 節後半-8 節)

イエスは神であり、まことに神の御姿でした。ですが、イエスはそれを離し難いものとはされませんでした。むしろ仕える者の姿を取り——人のしもべとなったのです。イエス

はご自身から進んで私たちのためにどれくらいの代価を払われたことでしょうか。

これはマーク・トウェインが書いたエドワード 6 世に関するフィクション『王子と乞食 (*The Prince and the Pauper* 19 世紀末に書かれた児童文学)』を考えればよく分かります。幼い王子は自分に似ている少年を見つけ、双子ほどそっくりなことに気付きます。その王子と乞食の少年は入れ替わり、乞食の目から外の世界を見ようとしました。そして王になるはずの王子が外で遊んでいる間、父親のヘンリー 8 世が亡くなり、乞食の少年がほぼ王にされかけたというのがこの物語です。この話では王子は王子であることに変わりはありませんが、自分が権力を持たない状態になる必要があったということが示されています。

イエスは神の御姿なるお方であり、何らかの形で神ご自身でした。御父から区別されているとしても神とひとつでした。それゆえイエスさまは**なさろうと思えば、神の子であるという理由から、5 千人を養うことも、水の上を歩くことも、石をパンに変えることも出来**ました。サタンが荒野でどう誘惑したか、また十字架から降りられることや、ご自身をよみがえらすことも出来たことを考えてみてください。しかし人々のためにイエスさまはご自身の威光を諦められました。イエスさまが 5 千人を超自然的に養ったのは聖霊の力によったと聖書は書いています。また水の上を超自然的に歩いたのも聖霊の力によるものでした。そして亡くなった少女を超自然的によみがえらせたのも聖霊の力によりました。しかしカルケドン公会議はこれを否定し、イエスさまの行為は神であったためだとしました。彼らはイエスの神性を過大視したのではありません。聖霊が必要ではない純粋な神として、イエスの人間性を軽視したのです。

『そこで、子たちはみな血と肉とを持っているので、主もまた同じように、これらのものをお持ちになりました。これは、その死によって、悪魔という、死の力を持つ者を滅ぼし、』(ヘブル 2 章 14 節)

カルケドン公会議の決定は、聖霊の働きが終わったとする終結論 (*Cessationism*) の基礎を据えました。そして神格に三位一体があるとする代わりに、『イエスのみ』という考えをもたらしました。

『三位一体』という言葉を最初に用いたのはテルトゥリアヌスです。彼は三つ又に分かれている小枝を例えに説明し、アイルランドのブラザー・パトリック (*Patrick*) は後に三つ葉のクローバーをもって真似をしました。ですがカルケドン公会議では三位一体のキリスト論 (御父、御子、聖霊に基づいた神の見方) を支持する代わりに、イエスの神としての子性を強調し、聖霊を除外視し、バランスの欠いたキリスト論に行き着きました。結果

として聖霊の働きが隅に追いやられました。彼らはただ御父と御子だけに関心を向けていました。そして聖霊は彼らの考えの中で影が薄くなり、敬遠される事柄となりました。

宗教改革者たちはカルケドン公会議に従いました。彼らは聖霊の研究に重きを置きませんでした。カルヴァンは書物の中で聖霊について書き記しましたが、その考えは聖霊の賜物がすでに途絶えたというものでした。ローマ・カトリック教会はプロテスタントが関わりたくないと思うような多くの偽りの奇跡を宣伝していました。ローマと同種のものに見られることを拒んだために、改革者たちは奇跡を拒否したのです。

ローマ・カトリック側では状況がこれより深刻でした。イエスは神であったのですが、イエスの人間性が軽視されたため、本来イエスが人となられた神、その仲介者であられたのに——『神は唯一です。また、神と人との間の仲介者も唯一であって、それは人としてのキリスト・イエスです。』（1テモテ 2章 5節）——神と人との仲介者が必要とされました。カルケドン公会議の過ちを受け入れたためにもうひとりの仲介者を必要としたのです。それゆえ、彼らはマリアをイエスの元へ行くための仲介者としました。今日見られるような状況はこの公会議まで遡ります。

もうひとつの公会議は 325 年に行われたニケア公会議です。スミルナの時代、迫害は教会を清く保つための神の手段でした。偽の信者はいつも排除され、真に救われた者たちだけが自身の信仰のために死ぬことを選びました。人々は背教するか、死ぬかという選択を迫られていました。

● コンスタンティヌス

当時ローマ帝国は崩壊の危機にあり、イングランドの町ヨークで状況は悪化し始めました。ヨークの町はその頃、ローマ帝国の実質上の首都となっていました。コンスタンティヌスはその土地の軍司令官であり、そこで皇帝の座に着きました。コンスタンティヌスはクリスチャンたちが殉教する状況を観察しました。そして彼らの道徳性を見て、キリスト教を国家宗教にすることの利便性を見出したのです。

コンスタンティヌスがミルウィウス橋で勝利を挙げた時、空に十字架が現れて、「これをもって征服せよ」という声を聞いたという逸話がありますが、彼は生涯のうちによく異教の神々の幻を見たことと記しています。最も客観的な歴史家たちは、増大するキリスト教徒を利用しようとして行った政治的戦略だったのではないかと考えています。しかしこれが物事をより悪化させることとなりました。

『見よ。その日が来る。——主の御告げ——その日、わたしは、イスラエルの家とユダの家とに、新しい契約を結ぶ。その契約は、わたしが彼らの先祖の手を握って、エジプトの国から連れ出した日に、彼らと結んだ契約のようではない。わたしは彼らの主であったのに、彼らはわたしの契約を破ってしまった。——主の御告げ——彼らの時代の後に、わたしがイスラエルの家と結ぶ契約はこうだ。——主の御告げ——わたしはわたしの律法を彼らの中に置き、彼らの心にこれを書きしるす。わたしは彼らの神となり、彼らはわたしの民となる』(エレミヤ 31 章 31 節-33 節)

この箇所は国家指導者や宗教指導者からの応答を求めているのではなく、個人による神への応答を求めています。

「先祖と結んだような契約ではない」国家的教会は初めから想定されていません。しかし政治的な動機に動かされたコンスタンティヌスは、国家的教会を作り上げました。そして迫害が止んだので、迫害は教会を清める要素ではなくなりました。国家的教会に何が起こったかという、イエスが死をもって取り除こうとしたものを、コンスタンティヌスが再び元通りにしてしまったのです。後の皇帝ユスティヌスによってもたらされた損害は、同じ程教会に対して有害なものでした。

コンスタンティヌスの英雄伝説はさまざまな問題に扉を開きました。ローマのパンテオン神殿は新しい神々で溢れかえりました。贈り物を送る異教の神は聖ニコラオス（サンタクロース）に。異教の愛の神は聖ヴァレンティヌス（バレンタイン）に。ミネルバやアシユタロテ、イシュタル、エペソのダイアナはどうだったでしょうか。天の女王と呼ばれていたのは誰でしたでしょうか。天の女王はエレミヤ 44 章に 4 回登場します。それをマリアと呼びましょう。異教の女神であっても何も気にはいけません、というようにです。タンムズはエゼキエル 8 章 14 節に登場します。タンムズとは母親に抱かれた赤子として崇拜されていたバビロンの神です。その姿は母マドンナと幼児という神の先駆けとなりました。『*The Two Babylons* (二つのバビロン)』という本の中で著者ヒスロップ (*Hislop*) は、タンムズがいかにかにニムロデの生まれ変わりであるかを説明しています。これがマドンナと幼児の聖画の起源だと想定されます。

皇帝崇拜と関連する伝統はコンスタンティヌスが首都をローマから東のコンスタンティノーブルに移した時、中世の教皇庁に受け継がれました。その遷都も政治的動機からなされたもので、皇帝は首都を東側に移すことにより崩壊状態にある帝国の結束を高めようとしていました。そしてローマにあった皇帝の遺産はローマ司教たちに譲り受けられました。それに伴いローマ司教たちは自分たちの優位性と、ペテロからの権威を主張するようになりました。

そのようなことを最初に行ったのは 598 年のグレゴリウス 1 世 (*Gregory I* 別名を教皇大グレゴリウス) です。20 世紀に名を馳せたローマ・カトリックの神学著作家、ニューヨーク出身のフルトン・J・シーン (*Fulton J. Sheen*) は、教皇権がペテロから受け継がれたものではないとし、また 5 世紀までそのような考えも無かったと記しています。エウセビオスは使徒の継承を記していますが、教皇権の継承ではありません。グレゴリウスの以前にも多くの教父や多くの『教皇』が存在しました。対して使徒 15 章に記されているように、エルサレム会議にて裁定を下したのはヤコブであり、ペテロではありません。ペテロが公衆の面前でパウロに非難された時もありました (ガラテヤ 2 章 11 節)。その他の問題が最初の教皇とされているペテロに対して挙げられます。ペテロに不謬性は無く、逆の状態であったという証拠しかありません。一方、指輪への口づけや、座に乗せられ神のように着座する儀式はすべて皇帝に対する崇敬と崇拝から来たものです。

● キプリアヌスと典礼主義

カルタゴで 249 年に司教となったキプリアヌス (*Cyprian*) は、そのちょうど前の時代に教会に否定的な変化をもたらしました。彼が後に信仰のため殉教したとはいえ、二つの基本的な事柄を誤解していました。それは制度化された教会の一致と、典礼主義です。当時、毎年行われていたカエサルへの誓いや皇帝崇拝によってイエスの御名を妥協した者が再び交わりに戻ることができるかどうかという問題の議論が盛んになされていました。

ノヴァティアヌス派 (*Novatians*) の者たちはその問題に対し厳格な立場を取り、信仰を捨てた者をそのまま受け入れはしないとしました。しかし制度化された教会は寛容な立場を取りました。北アフリカの原住民クリスチャンたちはベルベル人と呼ばれました。今日のベルベル人はイスラム教徒たちですが、彼らは死か改宗かを迫られて強制改宗させられた人たちです。しかしそのインド・ヨーロッパ語族であるベルベル人たちは、教会の初期の時代には非常に敬虔なクリスチャンであり、多くの殉教者を輩出しました。彼らは非常に厳格な立場を取り、イエスのために死ぬことも厭わず、人がイエスを知ったなら死ぬ覚悟も出来ているはずだと考えていました。彼らはそれを特権とまで考えていました。これが後に『ノヴァティアヌス派分裂 (*Novation Schism*)』の基を作ることとなります。

キプリアヌスは、母なる教会を信じなければ、父なる神は信じ得ないとして、組織化された教会の概念を見出しました。ノヴァティアヌス派は相対する独立の諸教会を立ち上げ、彼らはキプリアヌスに反対することはないが、非聖書的な組織化された (母なる) 教会からは独立する姿勢を表明しました。彼らが正しいか間違っていたかは別の問題ですが、ノヴァティアヌス派は分派を起こす者たちとして非難されました。キプリアヌスは中央集権

的な教会の概念を支持していました。

キプリアヌスはまた典礼主義者でもありました。彼はバビロンを起源とする考えを取り入れ、それを『エクス・オペレ・オペラート (*Ex Opere Operato*)』と呼ばれるものまでに発展させました。それは典礼の儀式自体に恵みをもたらす力と有効性があるとする教えです。例えばそのような教えは幼児洗礼の中にも見られます。幼児が選択も出来ない状態で洗礼を受け、洗礼を授けている人でさえ効力を信じていない場合もありますが、「御父、御子、聖霊の御名により洗礼を授ける」という発言がなされれば、その幼児はカトリック教徒（後には分かれ出た正教徒とも）となるということです。キプリアヌスはこのようなことを信じ、パンとぶどう酒が文字通りのイエスの肉体と血になるという『化体説 (*transubstantiation*)』も信じていました。キプリアヌスと彼に追随する者たちは、最後の晩餐において、イエスご自身の祈りが唱えられたパンとぶどう酒が、文字通りの肉体と血になったと記されていないことを無視しました。一方キプリアヌスは決まり文句をバビロンの呪文のように取り扱いました。そしてその人自身が本当に信じ、悔い改めたかどうかは気に掛けなかったのです。

過越の祭りとの聖餐を本来のユダヤ的観点から学ぶ時、化体説の概念は全くの異質な教えとしか言えません。ユダヤ人のペサハ、セデルの概念がただ抜き取られて、異質な文脈に当てはめられた時しか化体説というおかしい教理にはたどり着きません。化体説は実際、パンとぶどう酒が受肉したイエスになると教えています。ローマ・カトリックがパンとぶどう酒を受肉したイエスとして実際に礼拝しているという事実を私たちは忘れるべきではありません。彼らは実際に**礼拝**行為をしています（訳注...「キリストご自身が聖体の秘跡に現存しておられるので、わたしたちは聖体を礼拝しなければなりません」『カトリック教会のカテキズム』カトリック中央協議会発行 p.430）。そして聖餐が行われる時、人食いの行為を実践しています。これは完全に異教のもので、とてつもなく非聖書的、また本来のユダヤ的な聖書からかけ離れたものであることは明らかです。

キプリアヌスはこのような人物でした。彼はヒッポのアウグスティヌス (*Augustine 354-430*) に多大な影響をもたらしました。アウグスティヌスは重要人物なので後に詳細に解説していきます。

● アンブロシウス

ミラノ司教であったアンブロシウス (*Ambrose 340-397*) はアウグスティヌスに影響を与えた中心人物の一人です。アンブロシウスは国家を統制するために教会を用いました。それは後代のジュネーブにおいてカルヴァン支持者たちが行ったこと、また程度は違えイ

ギリスの清教徒たちが行ったことと同じものでした。教会が国家を統制しようとする時にはさまざまな種類の問題を生みます。これも「先祖と結んだような契約ではない」との言葉に反しています。

本来、教会国家や国家的教会は存在してはならないものです。しかしアンブロシウスは破門の脅しを使い、皇帝たちにさえ教会の権威の下に服従するよう迫りました！ これはローマ・カトリック教会が何世紀にもわたって行ってきた方法です。破門の脅しを使って人々を戦争に向かわせることさえありました。このような行為が（ローマが権力を拡大した 1066 年のノルマン征服にて）イギリスに影響を与え、後にアイルランドも動かしました。

● ローマ・カトリックのアイルランド征服

アイルランドの人たちはイングランド人が自分の国にどのように関わり始めたかを全く知りません。それはイングランドのノルマン朝の王ヘンリー2世を通してでした。彼はフランス人であり、アングロ・サクソン系でもありませんでした。ヘンリー2世（1154–1189）は教皇ハドリアヌス4世からアイルランドを征服しなければ破門されるとの脅しを受けて、ケルト系教会に終止符を打ち、アイルランドをローマ・カトリック教国にしました。そのような脅しで教皇が最初にイングランド人たちを遣わしたなどアイルランド人たちは何も知りません。

教皇たちはいつの時代でも権力を政治的に使ってきました。現代でもそのような地位を持ったなら、彼らは同じように行うことでしょう。事実、イエズス会を通して、また『オプス・デイ（*Opus Dei*）』——ホセマリア・エスクリバーというスペインのファシズム支持者によって創設されたローマ・カトリック系カルト——を通して、教皇庁は自分たちの影響力拡大に努めてきました。

ローマ・カトリックはあらゆる形態の国際的ファシズムによって政治権力を確実に行使していました。スペインのフランシスコ・フランコやアルゼンチンのファン・ペロン、イタリアのムッソリーニ、ドイツのヒトラーらはローマ・カトリック司教団と協定を交わしていました。あらゆる機会に彼らは政治的権力を行使しており、今日でもオプス・デイを通してそれを行っています。ローマ・カトリックの手法は何も変わってはいません。

それでは、キプリアヌスとアンブロシウスがもたらした影響とは何だったのでしょうか。カルタゴのキプリアヌスは統一された教会を推進する典礼主義者でした。そしてアンブロシウスも教会が国家を統制すべきだと考えていました。アンブロシウスはアレキサンドリ

アのグノーシス主義の影響を受け、旧約聖書をかなりの度合いまで『靈的に』読みとりました。これがプラトン主義者への道を開きました。これらが重なり合い、この二人は教会に典礼主義とグノーシス主義の影響をもたらしたのです。

● アウグスティヌス、性の倒錯と悪霊の教え

ヒッポのアウグスティヌスはマニと長らく関係を持っていました。マニは肉体が悪であるというギリシア的考えを採用した者です。それゆえ、抑圧された性が今日までローマ・カトリックの中で制度化されています。すべての性行為が悪いという考えはここに起源を持っています。この教えはみことばの完全な曲解であり、全くの異端です。

これによりなぜ多くの司祭がケーシー司教 (*Bishop Casey*) の小児愛や、他のアイルランドの事件のように性的スキャンダルを抱えているのかが分かります。ローマ・カトリック聖職者の中での性的不品行を調査した『リチャード・サイプス・レポート (*The Richard Sipes Report*)』は、アメリカとイギリスのローマ・カトリック聖職者の少なくとも 40 パーセントがどの時代でも性的に活発であったとしています。これら聖職者たちは神の御前に独身の誓いをした者たちでありながら、長期間にわたって小児性愛、同性愛、サド／マゾ的關係を持っていた者たちなのです。

イングランドには小児性愛のローマ・カトリック司祭たちを専門に治療する精神病院が 4 つあります。そのひとつ、バーミンガム・グレースウェルの主任心理療法士はローマ・カトリック教会が深刻な性的問題を抱えた者の溜まり場となっていることを認めています。ある人たちは聖職が完全に独身であるため自分の性を抑圧するために教会に入り、また他の人たちは子どもに手を伸ばす手段として教会に来ます。アイルランドはこの問題を認めようとはしません。彼らはそのような聖職者を海外の治療に送るからです。しかしこのような問題は本当に広がっています。アメリカでこの種のスキャンダルは溢れかえっています。

イギリスではバーミンガムのローマ・カトリック大司教が異動になりましたが、その司教は七つの違った教区で小児性愛者として知られており、その全ての場所で幼児を性的に虐待していました。

ウェールズではジョン・アロイス・ライアン司教 (*Bishop John Aloysius Ryan*) が複数の女性と長年にわたる性的不品行を行い、また小児性愛の司教たちをかくまっていたことが明らかになりました。

グリーンベイのローマ・カトリック司教であった、ロサンジェルスロジー・マホニー枢機卿 (*Cardinal Roger Mahoney*) もまた、小児性愛の司祭たちが訴えられないようにかくまっていた。ボストンではバーナード・ロー枢機卿 (*Cardinal Bernard Law*) が性的虐待により人生を破壊されている子供たちを守らず、性倒錯者をかくまっていたと自供したために辞職に追い込まれました。このような性的スキャンダルはアフリカやアメリカ、ヨーロッパでかなりの数に上ります。しかし西洋世界で小児性愛行為を行う司祭の数が一番多いのはアイルランドです。

テキサスのアマリロ教区で、ある司教は有罪判決を受け仮釈放中であった小児性愛者を司祭として雇い、子供たちの傍で働かせたことにより逮捕されました。

オーストラリアでは児童虐待を行う修道女が少女たちと司祭たちに性的関係持たせていたことが判明し、その教会は修道女が「死亡した」と虚偽発表をしました。しかし後に彼女はニュージーランド・ウェリントンの女子修道院に隠れていることが明らかになりました。

バチカンはいくつかの性的スキャンダルを知っており、何も処置をせず、ロー枢機卿の辞職が最初に提案された時も受け入れることさえしませんでした。ヨハネ・パウロ 2 世は 2002 年のカナダ訪問の後、同国のモントリオールからラテン・アメリカへ飛びました。それは問題解決に失敗したことに関してアメリカで疑問の矛先が向けられることを避けたのです。また、ますます明らかになってきた事実を取り扱う振りをするために、実際に何も意味の無いような政策を取り決めました。

ローマ・カトリック教会が『ネズミの抜け穴 (*Ratlines*)』を用い、ナチ戦犯を有罪判決から守っていたことは詳細に記録が残っています。実際教皇ヨハネ・パウロ 2 世はユーゴスラビア出身のナチ戦犯であるステピナツ大司教 (*Archbishop Stepinac*) を称賛しました。

ヨハネ・パウロ 2 世はまたバチカン銀行総裁であったポール・マルチンクス司教 (*Bishop Paul Marcinkus*) をイタリア警察に引き渡すことを拒否しました。マルチンクス司教は後にカルヴィ事件として知られるようになるアンブロシアーノ銀行不正事件との関与を疑われ、逮捕状が出されていました。200 人以上が残忍に殺害され(カルヴィという人物自身もロンドンのブラックフライアーズ橋の下で首を吊っている状態で発見されました)、バチカンはこの事件のためにお金をだまし取られた預金者たちに数億ドル以上の賠償金を支払いました。それゆえヨハネ・パウロ 2 世のもと、ナチ戦犯やギャングをかくまっていた教皇庁が、今度は子供を食い物にしている性倒錯者、また犯罪者的な司祭たちを庇護してい

ることに何の不思議もありません。

ローマ・カトリック教会は当初からこのようなものはローマ・カトリックだけの問題ではないと主張してきました。ですが、実際統計的に見てこれは大いにローマ・カトリックまたアングロ・カトリックの問題です。この種の暴挙はプロテスタントや東方正教会、ユダヤ教においては一握りしかありません。

新約聖書で『悪霊の教え』(1テモテ4章1節)として非難されているこの聖職者の独身制の起源は、マニ教のグノーシス主義的考えをもたらしたアウグスティヌスにあると言う他ありません。彼らは性行為が必要悪であったと言います。東方教会ではアウグスティヌスはかつて一度も教会教父と認められなかったために、今日まで聖職者のための結婚が当たり前に行われています。そして教皇でさえ、ローマ教会の東側の諸教会にそれを許可しています。

● アウグスティヌスの見える教会と見えない教会

アウグスティヌスが教会にもたらした本当の長期的損害は、彼の『目に見える教会と目に見えない教会』という教えです。この教えの要点は、教会が真に改心した者と、名ばかりのクリスチャンで構成され、神だけがその違いを知っているというものです。これはある面では真実です。教理が疑わしい大きな教団の教会であっても、そこにはイエスさまと個人的関係を持つ人がいます。新生こそが本当の基準です。

その教えによって状況はどう変わったのでしょうか。彼らは古い契約の元へ戻ってしまいました。幼児割礼をする代わりに彼らは幼児『洗礼』をするようになりました。入信儀式は国家的教会制度の一部となっています。そしてその終わりにはどのような結果を生んだのでしょうか。旧約聖書のイスラエルと同じことが起こったのです。

英国国教会はイギリス人たちにどんなに『素晴らしい』証をしていることでしょうか！「ああ、そうです。私は聖公会員です。洗礼を受けたし、教会のフルメンバーですよ。洗礼証明書にそうありますし」そのような人が唯一教会に行く日は『洗礼を受ける』日か、結婚式の日か、埋葬される日だけです。まだ良い人はマザリング・サンデイやクリスマス、イースターにも行くかもしれません。そして自分のことをクリスチャンだと考えているのです。彼らの教会がそう言っているからです。彼らは文化的、また社会的にクリスチャンであり、ある面においては宗教的にもクリスチャンであることでしょうか。そして十戒のいくつかを守ろうとしているかもしれません。しかし心に割礼を受けていなければスタート地点に立ってもいません。

ここで何が間違っていたかを理解することは重要です。教会を改革し、使徒たちが教えたことに教会を引き戻すためには、教会と国家の間の非聖書的な婚姻関係を断たなければなりません。そうする代わりにルター (*Luther*) やカルヴァン (*Calvin*)、ツヴィングリ (*Zwingli*)、ヘンリー8世 (*Henry VIII*)、ジョン・ノックス (*John Knox*) らは何をしましたでしょう。彼らの行ったことは単にローマ・カトリック系国家教会を、プロテスタント系国家教会へと置き換えることでした。

目に見える教会と目に見えない教会という教理も捨て去る必要がありました。しかし改革者たちのしたこととは何だったでしょう。ルターは「クイス・レギオ・エイウス・レリギオ」すなわち「領主の宗教が、領民の宗教」ということを語りました。

英国国教会のための『39か条の教理』を記したフッカー (*Hooker*) は、イギリス帝国の市民は英国国教会の会員であり、英国国教会の会員はイギリス帝国の市民だと実質的に語っていました。このように彼らはイエスさまが取り除こうとした国家教会をコンスタンティヌスのように元通りに復元してしまったのです。

それゆえ人々は、神と個人的な関係を持ったからではなく、国家的な契約の内にいるため、神と関係を持っていると考えるようになりました。ジョン・カルヴァンはこれを改革派神学 (*Reformed Theology*) (※1)、または契約神学 (*Covenant Theology*) (※2) というものへとキリスト教化しました。しかし旧約と新約の関係は、継続的なものでありながらも非継続的なものでもあります。完全に継続的であるか、非継続的であるかのどちらかであるとは言い切れません。教会はイスラエルの継続であることは確かで、教会はイスラエルに置き換わったわけではありません。

● カルヴァン主義——新しい文脈における福音——そのプロセスにおける再定義

カルヴァンとアルミニウス (*Arminius*) は私たちの観点から見て後のサルデスの教会の時代に生きていた人物ですが、アウグスティヌスとの神学的・哲学的な関係により、ここでカルヴァン主義に触れておくのが賢明かと思われます。16世紀に合理主義が生まれてきました。しがたって、カルヴァンや他の者たちは当時合理的と考えられていた世界観をもって福音を再文脈化しようと試みました。しかし以前にも触れたようにそれはギリシア的世界観となっていました。改革者たちは16世紀の人文主義の影響を受け、ギリシャ語やラテン語の古典を学び、聖書を文学として学んでいた人たちでした。しかし彼らは非常にギリシア的な考えを持っていました。カルヴァンは黒か白かという考えを強く持っており、

16世紀の世界観と見合うものでした。そして彼は福音を自分の時代に再文脈化しようとしていましたが、最終的に福音を再定義してしまいました。これが初代教会に起こったことと同じです。福音を変えてしまったのです。

置換神学および契約神学の反対は、スコフィールド (*Schofield*) やダービー (*Darby*) らによってもたらされたディスペンセーション主義神学 (※3) です。彼らは各時代が断絶していること、すなわち『ディスペンセーション (天啓法)』を強調しました。両者のうちに真理があります。どちらか片側を強靱に支持するのは間違っています。ユダヤ的な思考をもって両方を保つことが私たちには必要です！

ジュネーブでカルヴァンは自分の教会にいる大半がクリスチャンでないことを知っていましたが、人々が教会に入って来た後に彼らを改宗させようとしていました。彼は幼児洗礼などを行いました。しかしこれは聖書的ではありません。

エレミヤはメシアが来て、彼らの父祖たちと結んだものではない新しい契約を与えると約束しました。イエスはそれを実行し、パウロが説明しましたが、後にコンスタンティヌスが登場してそれを逆行させました。アウグスティヌスも中世の教皇権も同じです。そして教会を改革し、聖書に戻るという名の元にルターが登場し、古い契約を元通りにしてしまいました！ カルヴァンやツヴィングリも同じことをしました。教会はこれらの人たちによって国家と再び婚姻関係を結んだのです。エレミヤはそうならないと語っていました。

これはこの人たちが良いことを行わなかったのではなく、非常に根本的なことを間違えてしまったということです。改革者の一世代後にプロテスタント主義は名ばかりのものとなってしまうました。今日、プロテスタント主義はローマ・カトリックよりも墮落しています。今日プロテスタント聖職者の多くが行っているように、復活と処女懐胎を否定するローマ・カトリック司教は誰もいません。しかしこのような問題はすべてコンスタンティヌスやニケア公会議、アウグスティヌスに遡るものです。キリスト教が国家の宗教となってしまうたからです。

教会を改革するためにはエラストゥス主義 (*Erastianism*) と呼ばれる教会と国家の婚姻関係、また目に見える教会と目に見えない教会の考えを取り除くことが必須です。また置換神学も取り去る必要があります。そして新約聖書とヘブライ語聖書を、ギリシア的な書物としてではなく、ユダヤ的な書物として解釈する方向に戻らなければなりません。改革者たちはこれらすべてに失敗してしまいました。

しかし正しい方向に向かおうとしていた非国教徒 (*non-conformists*) と呼ばれる人たちがいました。それはバプテスト派やアナバプテスト派などです。しかしサルデスの教会で見て行くように、改革者たちはこの人たちを迫害しました。

ペラギウス (*Pelagius* -420) はイングランドの異端的修道士で、原罪を否定しました。アウグスティヌスはこのペラギウス主義を正しく論破したことにより、有名になりました。しかし彼が教会に与えた損害の大きさを軽視してはなりません。今日のペラギウス主義者たちは、改心していない者もみな『神のかたちとして』造られていると言います (創世記 1 章 27 節)。しかしこれはアダムが墮落以前に創造されたことに関する記述です。墮落以降にアダムは『彼に似た、彼のかたちどおりの子を』生みました (創世記 5 章 3 節)。悲しいことに私たちはこの墮落したアダムのかたちどおりに生まれたのです。

最近のカルヴァン主義者たちは、アルミニウス主義とジョン・ウェスレーの考えをどのようにかしてペラギウス主義に関連付けようとしています。

● アルミニウス

ヤーコブス・アルミニウス (*Jacob Arminius* -1609) は、実質的に神を罪の原因であるとしたカルヴァン主義に反対しました。アルミニウス主義者たちはイエスの死が、罪のための贖いであり、神は誰が悔い改めキリストを受け入れるか予め知っておられるが、すべての人を救うことを望んでおられると考えます (2 ペテロ 3 章 9 節、1 テモテ 4 章 10 節)。アルミニウス主義は原罪を否定しません。原罪を否定することは人の墮落した性質を否定することです。実際、アルミニウス主義は、カルヴァン主義と異端ペラギウス主義という二つの間違いの中庸にあります。

● 予定説とサドカイ人

永遠の保障や予定説の問題は何もカルヴァンやアルミニウスから始まったものではありません。それはペラギウスやアウグスティヌスからでさえなく、旧約聖書時代に起源を持つものです。サドカイ人たちは運命を信じる決定論者でした。対してパリサイ人たちはすべてが予見され、予定されているが、選択は個人によるものだと語っていました。イエスはパリサイ人の方に同意されます。『人の子は、自分について書いてあるとおりに、去って行きます。しかし、人の子を裏切るような人間はわざわいです』 (マルコ 14 章 21 節) ユダヤ的思考は二つの相反する事柄を緊張関係の中に保つことができましたが、ギリシア的思考はそうではありません。ここに問題のルーツがあります。

アウグスティヌスはアンブロシウスがもとでアレキサンドリアの思考法を採用しました。アウグスティヌスは化体説を信じ、それをより詳細な言葉で定義し始めました。また彼は寓喩的解釈も用いました。アウグスティヌスはルカ 14 章 23 節の『(祝宴に)無理にでも人々を連れて来なさい』という箇所と言及し、教会も人をクリスチャンにならせるために暴力を使うことができると正当化さえしました。

『ジハード (聖戦)』やイスラムの運命論的思想『インシャ・アッラー (*Isha Allah*)』に類似した宗教的警察国家は、聖書のユダヤ・キリスト教的思考ではなく、哲学的にイスラムに似たカルヴァン主義的教理に依っています。イスラムはカルヴァンの生きていた 16 世紀のヨーロッパとキリスト教界に政治的脅威としてウィーンまで到達しました。イスラムは政治的には敗れましたが、ジョン・カルヴァンとベーズ (*Beza*) により哲学的には敗北を期しませんでした。

北アフリカではドナトゥス派 (*Donatists*) によって引き起こされた教会分裂がありました。彼らは自分たちの指導者が全て不品行であり、そのため (聖書的に) 従うことはできないとして、自分たちの教会を去りました。しかし彼ら自身の指導者たちの中にも不品行な者がいました！

アウグスティヌスはキプリアヌスの影響を受け、教会の一致を促進し、分裂に反対すると言いました。アウグスティヌスは「教会は、キリストの教会であるがために、人がどれほど汚れていても聖なるものだ」と語りました。

このためローマ・カトリック教会はスペインの異端審問や教皇権争い、教皇庁の墮落、ホロコーストにおける問題などに直面しています。ローマ・カトリック教会の指導者たちはこれらのことを否定はしませんが、それでも自身を『聖なる』ローマ・カトリック教会だと言います。イエスが聖なるものとするため死なれたからだと言うのです。

アウグスティヌスはまた『エクス・オペレ・オペラート』の典礼主義を擁護しました。その教えは誰が典礼を司式しても有効であるが、その人がローマ・カトリックの信仰を受け入れない限り有効ではないとします。

プロテスタント宗教改革の悲劇は、新約聖書に戻る代わりにアウグスティヌスに戻ってしまった事です。カトリック主義とプロテスタント主義のどちらもがカルケドン公会議から生まれ、アウグスティヌスの上に立っています。新約聖書への回帰こそが、カルケドン公会議より、アウグスティヌスよりも優先されるべき事柄なのです。

● キュリロス、ネストリウス、プリスキリアヌス

後にアレキサンドリアのキュリロス (*Cyril of Alexandria*) はネストリウスに従っていた他のクリスチャンたちを迫害し始めました。——ネストリウス支持者たちはマリアの神の母としての地位『セオトコス (*Theotikos*)』を否定しました。事実、テオトコスとは非聖書的・異教的な概念で、その単語自体も聖書に登場しません。この偽りの教えに反対した者たちが迫害を受けました。後にネストリウス支持者たち自身も深刻な偽の教理に陥りました。

西のイベリアにいたプリスキリアヌスは真理のために立ち上がったため、制度化された教会から処刑された最初の重要人物のひとりです。教会はますます真理から離れていき、より制度化され、政治関与を伴うエラストゥス主義に陥り、さらにヘレニズム化またプラトン主義に傾き、ユダヤ的ルーツから驚くほど離れていきました。

次第にギリシア語系の東とラテン語系の西が分裂を起し始め、中世には東方正教会とローマ・カトリック教会とに分離しました。

● 忠実な少数の者たち

このような状況でもなお、神はいつも忠実な残りの者たちを備えておられます。教会の最初期でも初期ネストリウス派は良い形で始まりました。ポーリカン派 (*Paulicans*) は果ては中国まで到達した宣教師たちでした。アルメニア帝国はローマ帝国以前の 301 年にキリスト教国となりました。極東まで到達した残りの者たちもいて、トマスはその最初の例であったことでしょう。

聖書的キリスト教、またそれに近いものは西洋では主にケルト系教会によって保たれていました。ビザンチン時代に東側の教会は、教会内の偶像礼拝への反発としてイスラムによって神に裁かれました。これが『ペルガモ』という言葉の由来です。『ペルガモ』とはどのような意味でしょうか？『離婚した』というものです。

神がなぜ『離婚した』という言葉を使われたのかを理解する必要があります。イスラエルが罪を犯した時は罪であることに変わりはありませんでしたが、イスラエルが他の神々に従った時、売春婦や淫婦と呼ばれました。偶像礼拝は霊的な姦淫と同じです。イスラエルはヤハウエの花嫁であり、ヤハウエはイスラエルの夫であるべきでした。ヘブライ語の『バアル』という言葉は『神』と『夫』どちらの意味も持っています。

したがって、イスラエルが偶像礼拝に陥った時、靈的な姦淫と同じことでした。そして神から移って偽の神々に行く姦淫は靈的な偶像礼拝です。ホセアや他の預言者たちは「ああ、シオンの娘よ、あなたは遊女になってしまった」と嘆きました。

同じことが教会にも起こりました。神がエレミヤ 3 章 8 節でイスラエルに離婚状を渡したように、偶像礼拝に陥った教会にも同じことが起こりました。

● ペルガモとイエス

『また、ペルガモにある教会の御使いに書き送れ。『鋭い、両刃の剣を持つ方がこう言われる。』（黙示録 2 章 12 節）

ペルガモの教会に対してイエスさまが強調されたことは『両刃の剣を持つ方』という特徴です。両刃の剣は肉と霊を分け、神のみことばを正しく分別し（ヘブル 4 章 12 節）、聖書的な事柄と非聖書的な事柄を分離します。

『「わたしは、あなたの住んでいる所を知っている。そこにはサタンの王座がある。しかしあなたは、わたしの名を堅く保って、わたしの忠実な証人アンテパスがサタンの住むあなたがたのところで殺されたときでも、わたしに対する信仰を捨てなかった。』（黙示録 2 章 13 節）

「そこにはサタンの王座がある」これは後に発掘され、1930 年代にドイツ人考古学者により東ベルリンに移されたゼウスの神殿を指していると思われます。その神殿は巨大な王座を有していました。本来の神秘宗教がニムロデのバビロンに端を発していることを今一度思い出してください（創世記 10 章）。その神秘宗教は小アジアに道を見出し、特にペルガモの都市を経由してアテネやギリシア世界に入り、そこからローマ世界に浸透しました。そのような経緯でペルガモはバビロンの神秘宗教の伝達経路となりました。「そこにはサタンの王座がある」そこはサタンが住む都市でした。化体説の習慣や聖職者による政治介入が行われている場所はサタンが住む場所であり、そこでキリストは容赦なく両刃の剣を用いられます。

「わたしの名を堅く保って」今一度思い起こしてもらおうと、パックス・ロマーナのもとで平和に生きるためにすべきだったただひとつのことは、年に一度「カエサルが主である」と誓うことでした（イスラムの信条も同様に一行からなる信条です）。しかしこれは主であり神であるイエスの御名を否定することでした。明らかにアンテパスはイエスの御名を否定せず、その代価を支払ったと思われます。

『しかし、あなたには少しばかり非難すべきことがある。あなたのうちに、バラムの教えを奉じている人々がいる。バラムはバラクに教えて、イスラエルの人々の前に、つまずきの石を置き、偶像の神にささげた物を食べさせ、また不品行を行なわせた。それと同じように、あなたのところにもニコライ派の教えを奉じている人々がいる。』(黙示録 2 章 14 節-15 節)

率直に言って何が聖書的でなかったかというと、偶像にささげられた物を食べること——化体説でした。バラムは占い師であり、偶像礼拝者、プロの呪術者でした。ニコライ派の教えに関しては以前に触れた通りです。

女性司教の任命に関する議論において、聖書は**すべての**クリスチャンが祭司であると明記していることを誰も考えません。もし人々が始めから聖書に固く付いているなら、そのような存在しないことのための無益な議論や分裂をすることはあり得ません。ニコライ派は他の人の上に権威を行使しようとする聖職者階級でした。これはグノーシスの影響から来ていることを思い出してください。

『だから、悔い改めなさい。もしそうしないなら、わたしは、すぐにあなたのところに行き、わたしの口の剣をもって彼らと戦おう。耳のある者は御霊が諸教会に言われることを聞きなさい。わたしは勝利を得る者に隠れたマナを与える。また、彼に白い石を与える。その石には、それを受ける者のほかはだれも知らない、新しい名が書かれている。』(黙示録 2 章 16 節-17 節)

新しい契約を念押しするかのようにイエスさまが個人に訴えかけていることに注目しましょう。イエスさまは個人に単数形を用いて話しかけておられます。「わたしは勝利を得る者に...」

この約束の終わりにおいて、イエスさまは主にイザヤ書に見られるテーマを引き合いに出しています。

『わたしの家、わたしの城壁のうちで、息子、娘たちにもまさる分け前と名を与え、絶えることのない永遠の名を与える。』(イザヤ 56 章 5 節)

イザヤを通してイスラエルにもたらされた約束は、今イエスさま自身にあって成就することを示されました。

『そのとき、国々はあなたの義を見、すべての王があなたの栄光を見る。あなたは、主の口が名づける新しい名で呼ばれよう。』（イザヤ 62 章 2 節）

そして出エジプト記では、秘密のマナ、隠れたマナについての記述があります。

『モーセはアロンに言った。「つばを一つ持って来て、マナを一オメルたっぷりその中に入れ、それを主の前に置いて、あなたがたの子孫のために保存しなさい。』（出エジプト 16 章 33 節）

また黙示録 14 章 3 節には、同じように贖われた者たちだけが歌うことのできる秘密の歌があると書かれています。

これらは旧約聖書の約束であり、その約束が勝利する者には与えられると神は示しています。

● ミサにおける偶像礼拝

『しかし、あなたには少しばかり非難すべきことがある。あなたのうちに、バラムの教えを奉じている人々がいる。バラムはバラクに教えて、イスラエルの人々の前に、つまずきの石を置き、偶像の神にささげた物を食べさせ、また不品行を行なわせた。』（黙示録 2 章 14 節）

何万人ものクリスチャンたちがこの偶像礼拝への参加を拒んだために殺害されました。しかし今日では福音派の主な指導者までもがミサを容認できると言っています。この種の不品行を続けても良いと人に教えることは、救われた同性愛者に同性愛の状態にとどまるよう、また救われた大酒のみに酒を飲み続けるように言うようなことです。化体説を実行する教会に留まっても良いと語ることは、偶像礼拝を行い続け、参加し続けるのを奨励していることと変わりがありません。救われたならそのような教会から出てくる必要があります。その人たちはサタンの教えを信じることを止めるべきです。

ペルガモの悪い点に対し立ち上がるクリスチャンは、アンテパスの道を通らなければならないことを覚悟しなくてはなりません。それはこの国でも起こり、宗教改革でも起こったことです。これらのことに対して立ち上がる人はアンテパスの払った代価を肝に銘じておくべきです。しかしイエスさまがアンテパスについてどう語ったかをよく見てください。「わたしの忠実な証人アンテパス」イエスさまに会い「わたしの忠実な証人…」と言われることは素晴らしいことではないでしょうか。そのことのためであれば死ぬ価値がありま

す！ しかしながらアンテパスは残忍に殺されました。人々が彼を取り除いた方法は決して心地よいものではありませんでした。しかしアンテパスを焼き殺した場所には花が咲いたと言われています。この事は『*The Martyr's Mirror* (殉教者の鏡)』や『*Foxe's Book of Martyrs* (フォックスの殉教者伝)』に記されてあります。

これがペルガモの教会の姿でした。

● 結論

要点をまとめると以下ようになります。

第一に両刃の剣です。このようなひどく不品行な罪がキリストの体に忍び込んできた時、それらと決して妥協してはなりません。これは人に敵対するというわけではありません。適切な対応はいつも**人のため**であるべきです。ですが本当に人のために物事を行おうとすると、その人たちを破滅に追いやる欺きに**反対すること**が必要不可欠です。

第二に、プロテスタント主義とカトリック主義はどちらもカルケドン公会議が元となっています。そして残念なことにどちらもアウグスティヌスに依存しています。しかし本当に大切なことは使徒の本来の教えに戻ることです。

第三に、今日キリストの体の内に見られる異端は、ただ初代教会に存在していた異端の再来であることに注目してください。キリストの体の外にある欺きはそれほど懸念すべきものではありません。キリストの体の内にあるものこそ、最も甚大な被害をもたらすものです。そのような異端は初代教会にも侵入し、不幸にも現代にも存在しています。

しかし教会が墮落し、いかに時代が暗くとも、いつも忠実な残りの者たちは存在し続けます。どの時代、どの教会にいるクリスチャンでも、主の恵みにより忠実な残りの者たちとなること、それが私たちの祈りです。

注釈：

(※1) 改革派神学

ジョン・カルヴァンの綱要とその定義、またオランダでのドルト会議にてテオドール・ベーズに率いられた支持者たちによって再定義されたものに関連しています。改革派神学はローマの邪悪さを認識した16世紀改革者たちの神学で、キリスト教の中から非聖書的な儀式や伝統を取り除こうとした神学です。ですがその信奉者たちは国家教会制度を取り入れ、幼児洗礼まで行い、ローマ・カトリック系の国家教会をプロテスタント系国家教会へと入れ替えたただけでした。ローマ・カトリックと同様にカルヴァンは原語のギリシア語やヘブライ語よりも、ラテン語のウルガタ訳に従い、教皇庁のように使徒の権威と共に教会教父の権威も認めていました。カルヴァンは教会教父、特にアウグスティヌスを新約聖書と同等に教理を決定する権利を持つ者として考えていました。哲学的に見て、改革派神学はユダヤ・キリスト教思想よりもイスラムに共通点を多く持っています。それは全て起こることが創造主のみこころのままだとするイスラム教思想『インシャ・アッラー』のヨーロッパ版であるからです。そのためカルヴァン主義では聖書的なキリスト教と違い、神がある人々を地獄で永遠に苦しませるために造ったことになり、サタンでなく、神が死と悪の作者となっています。

(※2) 契約神学

契約神学は旧約聖書の原則や契約が教会に直接適用されると教える神学です。この立場はイスラエルの特別な地位やイスラエルへの神の将来の目的を否定し、教会をイスラエルと見なし、洗礼を割礼と同等のものとして見なします。契約神学は実際にはカルヴァンの改革派神学の基礎でした。彼らの契約の概念には聖書的な基礎がありませんが、神は二つの契約のみを交わしたと主張し、それは後に教会を生んだイスラエルへの古い契約と新しい契約ではなく、アダムとアブラハムへの契約のことだと言います。この基礎に立つと、教会はイスラエルとなり、聖書（主に旧約聖書）を法律と法律制定の体系とした神権政府を建て上げることができます。これは『*theonomy*（神律）』と呼ばれ、彼らは旧約聖書のイスラエルのように政府や経済、文化を支配する権利が神から与えられているとし、千年王国でのキリストの統治ではなく自分たちで地上に神の国を建て上げようと考えています。契約神学支持者たちは千年王国を無視するか、教会の時代のことだと霊的解釈を施してしまします。

(※3) ディスペンセーション神学

この見解は歴史には様々な時代や区分があるとし、その時代ごとに神は特定の法で人を取り扱われ、またその各時代は重なり合うことがないとし、ディスペ

ンセーション神学はイスラエルと教会を明確に区分し、置換神学を退けます。契約神学よりも真理に近いとはいえ、ディスペンセーション神学はジョン・ネルソン・ダービーや C・I・スコフィールドらにより、聖書の記述を越えてしまいました。新約聖書はただふたつの『ディスペンセーション』、旧約と新約とを教えているのであって、大半のディスペンセーション主義者たちが教える 7 つやそれ以上のものではありません（彼らはまた「恵みの経綸」を意味するディスペンセーションと、「契約」という言葉を間違って同等に見なしています）。現代の多くのディスペンセーション主義者たちは、カルヴァンの TULIP の考えとディスペンセーション神学を混ぜ合わせていますが、カルヴァンの契約神学は退けています。